

書 評

環境経済学のフロンティア

有村俊秀・片山 東・松本 茂 編著

出版社：日本評論者 発行年：2017年9月25日

価格：3,400円+税 ISBN:9784535558571

環境経済学は、1960年代にミクロ経済学の応用分野として確立されてから半世紀を越え、幅広いテーマを対象とした分野に発展している。発展の方向は、理論分析に留まらず、データ整備やコンピューターの性能向上にもなって実証分析に及んでいる。そんな中、若手研究者や新たな分野での研究を試みている研究者にとって先行研究のレビューは労力を要する作業となっている。サーベイ論文は、最新の動向を掴むには有益であるものの特定の研究課題に特化しているケースが多い。

そこで本書は、テーマごとに4部構成（①産業活動と環境問題、②消費活動と環境問題、③国境を越える環境問題、④途上国と資源管理）から成る、環境経済学における諸問題を理論と実証の両面よりまとめているハンドブックである。一方、**Handbook of Environmental Economics** や **Handbook of Environmental and Resource Economics** などとは異なり、コンパクトに最新の研究動向および今後の研究テーマについて紹介している。

一方、本書には欠点や改善点もある。以下では、2点について言及する。

第1に、紹介されている研究事例が日本語で書かれた論文が少ない。研究者として評価を得るのには、英文雑誌に論文を掲載する必要がある。しかし英文の論文は、本書が想定している読者層（環境経済学に関心をもつ学部上級生や修士課程の学生 p.ii）にはハードルが高いと思われる。そこで、和雑誌に掲載されている論文（日本語）の紹介があると、本書を卒業論文やゼミ論文にも有益である。

第2に、各章の間の関連性が明確ではない、構成となっている。具体的には、共通する分析手法（計量経済モデルや応用一般均衡モデルなど）に関する技術的な内容が割愛されている。例えば、操作変数の重要性は、企業の環境取り組み（第2章）と家計の省エネ行動（第4章）に共通する問題である。そのため、本書の付録として実証研究や理論研究に関するテクニカル・ノートがあれば各章の関連性を深まる。さらに、環境関連データの入手方法や入手の難易度（個票データ・予算）などもまとめられていれば指導者・若手研究者にとって有益な情報である。

上記の2点は、本書を批判するものではない。多くの情報を限りある時間で処理し、研究に生かす必要は、昔から変わっていない。研究蓄積のスピードは、学際的な研究や研究テーマの細分化により、今後さらに加速していくことが予想される。若手研究者や研究者

を育成する指導者は、効率的に最新の研究動向の把握と上記で指摘した2点を念頭に、独創的な研究・指導を行う必要がある。本書は、このような研究・教育活動に有益であることから一読をお勧めします。

山形大学 杉野 誠